

北海道支部はもうすぐ30才になります

支部幹事長 前 野 紀 一（北大低温研）

日本雪氷学会北海道支部の構成メンバーは、現在193名で、全体の約23パーセントを占めています。支部会員は広く全道に分布しておりますが、おおざっぱにいて約50パーセントが札幌市内か近郊在住の方達です。毎年6月の総会と研究発表会、および秋の講演会が札幌で開催されることの多いのは、このような事情のためです。

しかし、札幌在住でない他の約50パーセントの支部会員にとって、これらの文部事業に参加するのはそれ程簡単ではありません。それで、支部会では毎年1回札幌以外の地区で講演会あるいはシンポジウムを企画し、実施しております。昨年度は、帯広市百年記念会館において『十勝の寒さと生活—寒さの利用と楽しみ方—』のシンポジウムを昭和62年1月29日に開催し、一昨年度は北見市の北網圏北見文化センターにおいて『寒さと暮らし』のシンポジウムを昭和61年2月14日に開催致しました。

今年度の後期事業の詳細はまだ決っていませんが小樽地区が候補に上っており、検討中です。道内各地区での事業が円滑に、かつ活発に行われるよう、幹事会の中には数年前から地区幹事がおかれるようになりました。将来、全道各地区に地区幹事がいるような状態になればよいと思います。ただし、地区幹事だけを頼りにしないで、支部活動に対する要望は遠慮せずに幹事会あるいは理事会にお知らせ下さい。

さて、上記のような活動を続けてきた北海道支部は、あと数年で設立30周年を迎えます。今年は私達の仲間の日本気象学会北海道支部が30周年を祝い、昨年は同じく仲間の日本農業気象学会北海道支部がやはり30周年を祝いました。これらの三つの学会の北海道支部が同じ昭和30年代の前半に設立されたという事実の裏には、きっと重要な社会的、学術的理由があるのだと思います。私達は、北海道支部設立30周年を迎えるにあたり、30年前の、そして30年間の先輩達の御苦労を見直し、次の30年のための指針を見付けださねばなりません。皆様各位の御協力をお願い致します。なお、30周年を祝う「数年後」が正確にはいつかを、現在散在している支部資料を整理しながら調査中です。

（野一前幹事）



低温研の古い建物

中谷先生の随筆を読んでいたもので、入学してからずっと、この古い建物に親しみを感じていた。

ここで、雪氷学会北海道支部の研究発表会が開かれたとき、1967年のことだったが、私は初めて発表した。鉄道防雪林についてであって、その後、「雪氷」誌に投稿した。拙稿を受取って下さったのが、現支部長の若濱先生であったように記憶している。

あれから20年、ほそぼそながら、雪と森林についての研究をつづけている。

(斎藤新一郎)

昭和 62 年度研究発表会講演要旨

日 時：昭和 62 年 6 月 3 日（水）

場 所：北海道大学学術交流会館、第 1 会議室

研究発表プログラム

13:55～15:15 座長 宮田 明（北海道農業試験場）

1. 送電線のギャロッピング振動
山岡 勝（北海道電力㈱総合研究所）
2. 融雪水の積雪浸透と流出
浜田 和雄、児玉 裕二、小林 大二（北大低温研）
3. 北海道の吹雪頻度分布と防雪施設の分布
石本 敬志、竹内 政夫、寺井 勝之、難波 重寿（北海道開発局）
4. 反射式吹雪計による視程測定
福沢 義文、竹内 政夫、石本 敬志（北海道開発局）

5. 雪尺のまわりに出来る雪の穴とその対策の試み
小島 賢治

15:25～16:45 座長 秋田谷英次（北大低温研）

6. スキー場斜面を維持するための木本萌芽幹の刈払い方式について
斉藤新一郎（北海道立林業試験場）
7. 屋上雪庇防止に関する基礎研究
苫米地 司（北海道工業大学）、小林 敏道（小林プランニング）
8. 北海道内の市町村における雪対策の現状について
苫米地 司（北海道工業大学）、加藤 玲（北海道商工指導センター）
9. 日勝峠雪崩（昭 62. 1. 29）の発生機構
清水 弘、秋田谷英次（北大低温研）
10. 道路雪氷の消耗過程と熱収支観測
成瀬 廉二、石川 信敬（北大低温研）、武市 靖（北海学園大）、
西村 浩一、成田 英器、前野 紀一（北大低温研）